

# 04

## 外国とのつながりをもつ子ども達と教育 —見えにくい差異に注目して—

渋谷 真樹

### 1 見えにくい外国とのつながりをもつ子ども達

グローバル化がすすんで、海外で学んだり、仕事をしたりする人が増えてきました。その結果、日本の学校でも、さまざま文化的背景をもつ子ども達がともに学ぶようになっていきます。「外国にルーツをもつ子ども達」とか、「外国につながる子ども達」などと呼ばれています。

でも、これまで自分のクラスには、外国人の子どもはいなかったなあと思った人はいませんか？ 外国とのつながりといっても、自分には縁遠いと感じる人もいるかもしれませんね。

待ってください。本当にそうですか？ いっけんまったくの日本人に見える友人が、子どもの頃にアメリカに住んでいたとか、祖父母は韓国人だとかいうことはないですか？ 自分自身の母親が中国人だという人もいるかもしれませんね。生まれた時から日本に住んでいる、日本語がぺらぺら、見た目は日本人と変わらないといったような理由で、ちがいはわかりにくいけれど、外国とつながりをもっているという人は、思っている以上に多いのです。

奈良県外国人教育研究会の調査によると、2017年度、奈良県には、自分または親・祖先が外国出身である小中学生は1000人以上いました。そのうち、在日コリアンの小中学生は184人、「新渡日」あるいは「ニューカマー」と呼ばれる、より最近になってから家族が来日した子どもは884人です。こうした子ども達の中には、見かけや名前、言葉といった点で、特にちがいが無い子どもも少なくありません。日本語指導の必要な子ども達については他の章で学びますので、この章では、いっけんわかりにくいけれど、文化的な多様性をもっている子ども達について詳しくみていきましょう。

### 2 在日コリアンの子ども達

在日コリアンとは、1910年から1945年まで日本が朝鮮半島を植民地支配していたことなどに由来して日本に暮らしている人々やその子孫です。在日コリアンの存在は、日本の国際化、グローバル化の、もっとも古くからある例といえます。今日の在日コリアンの子どもや若者はすでに、家族が来日してから三世以上たっていることが多く、日本の言語や文化の中で育っていることがほとんどです。帰化といって、日本の国籍を取得している人もいますし、親の一方が日本人なので、日本国籍をもっている人も多くいます。名前も日本的であることが多いので、ちがいはわかりにくいのです。

奈良や大阪は、在日コリアンの子ども達の民族性を大切に育ててきた歴史があります。今でも、生駒市などでは、在日コリアンの保護者達が、自分の子どもに韓国の言葉や伝統文化を教えるオリ二会(子ども会)を行っています。自分の家族の歴史を知り、自分のルーツとなる文化に親しむことで、自分に対する感情がより安定することが多くあります。

在日コリアンの保護者達は、地域の学校に出向き、衣装や遊びなどを通して、日本の子ども達に文化を伝える活動もしています。朝鮮半島は、まさにお隣り。歴史的な交流も長く、7世紀の白村江の戦いでは、唐と新羅の連合軍に敗れた百済の人々が日本に亡命し、住み着きました。「なら」という言葉は、韓国語で「くに」という意味だそうです。近鉄奈良駅前の噴水に立つ行基さんも、渡来人だと言われています。

本学は、韓国の協定校である公州大学と、毎年百済シンポジウムを開催して、両国の文化交流の歴史を積み重ねています。せっかく奈良にいますので、古代の異文化交流に想いを馳せてみるのもいいですね。

近代に入ってから、より両者の接触が強まります。1914年に開通した、奈良と大阪を結ぶ生駒トンネルの工事にも、朝鮮半島の人々が貢献しました。今も、大阪には、大きなコリアンタウンがあります。実際に足を運んでみると、たくさんの発見があると思います。

小学3年生の国語の教科書には、朝鮮民話の「三年とうげ」が掲載されています。本学のもうひとつの協定校である光州教育大学の学生によると、韓国の音楽の教科書には、日本の童謡が載っているそうです。教科を通して、子ども達に隣りの国の文化を伝えるのもいいですね。

朝鮮半島について学ぶことは、クラスの中につながりをもつ子ども達がいることも多いので、かつこの国際理解教育になります。朝鮮半島に詳しくて、親しみをもっている先生のクラスならば、きっと在日コリアンの子どももそのまわりの子どもも、日本と朝鮮半島とのつながりに前向きな関心をもつことができるでしょう。

在日コリアンをテーマにした国際理解教育については、先生たちがさまざまな教育実践集を出版しています(奈良県外国人教育研究会(2009)や開発教育研究会(2012)など)。いろいろな授業のアイディアに触れると、自分もこんな授業をしたい、自分ならこんな活動もできそうだと、教師への夢がふくらみますね。ぜひ、読んでみてください。

### 3 日本生まれ日本育ちの外国人

在日コリアンに比べて、「新渡日」の家族は、より最近になってから日本にきています。とはいえ、奈良県外国人教育研究会によると、奈良県に住む「新渡日」の子ども達のおよそ6割は、日本で生まれています。中国につながりをもつ子どもが、4分の1です。親の仕事の都合で日本にきた子どももいますし、中国帰国者といって、第二次世界大戦が終わった時に中国大陸にいて、混乱や国交断絶によって、長いこと日本に帰れなくなった人たちの子孫もいます。

子ども自身が日本で生まれ育っている場合、一番使いやすい言葉、すなわち第一言語は、日本語であることがほとんどです。流暢に関西弁を話しているのでも、何も問題はないだろうと考えがちですが、いざ学習となると、問題があることが珍しくありません。というのは、親にとって日本語は外国語で、家庭で話される日本語の量や質が、他の日本人家庭に比べて十分でないことが多いからです。思考することのできる日本語を、しっかり習得させることが大切です。

逆に、親が話す言葉を子どもが理解できない、という問題もあります。親の言っていることはわかる場合でも、自分で話すことは難しいこともあります。奈良県の「新渡日」で、家庭で親の言葉を使って会話をしている子どもは、4割にも達しません。もしも親の日本語が十分でないならば、親子のコミュニケーションがうまく取れないことになりかねません。

言葉に不自由であることは、アイデンティティにも大きく影響します。たとえば、中国に住む親戚に会いに行っても、自分は中国語が話せず、親に通訳してもらわなくてはいけないとしたら、自分が中国人だと思えるでしょうか？ そんな子どもに、日本の人々が「中国語話して！」と迫っても、かえって自信を失わせる場合もあります。中には、自分が外国につながっていることを隠したいあまりに、外国につながる親のことを疎ましく感じてしまう子どもも少なくありません。

かつては、日本語力を育てるために、親の話している外国語は使わない方がよいと考える人もいました。日本にいるのだから日本のやり方に合わせさせる、という、同化を強調する考え方もありました。しかし、今では、家族・親戚との絆や、本人のアイデンティティを育てるために、親の言葉も大切にされた方がよいという考え方が主流です。複数の言葉を操ることは、個人にとっても社会にとっても財産だという考え方も広まってきました。

複数の言葉を育てるためには、まわりの友達や大人が、その言葉、そして文化を尊重していることが必要です。とりわけ教師は、子ども達に大きな影響を与えます。さまざまな文化的背景を、オープンに分かち合っているクラスが望ましいでしょう。そのためには、教師がさまざまな文化に敬意や興味をもって、開かれた態度で接していくことが大切です。

まずは、「新渡日」の子ども達の背景や現実を知るのがいいですね。中学校や高校の先生たちが、自分の出会った子ども達をモデルに作った、よいマンガ(「外国につながる子どものたちの物語」編集委員会、2013)があります。女優の一青窈さんや料理研究家のコウケンテツさんなどのインタビュー集(川上編著、2010)もあります。

また、奈良県内には、「新渡日」の子どもを支えるボランティア・グループが複数あって、本学の学生も積極的に活動しています。ぜひあなたも、足を運んでみてください。

### 4 国際結婚家庭の子ども達

国際結婚の制度が確立したのは、明治期です(嘉本 2008)。とはいえ、国籍という概念がその時期に生まれたということで、その前にも、異なる国の人とのロマンスはもちろんあったでしょう。

第二次世界大戦後には、駐日アメリカ軍に関係する男性と日本人女性とが子どもをもつようになりました。アメリカ人とアジア人ということで、アメラジアンと呼ばれています。そうした子ども達の中には、厳しい差別にさらされた人も少なくありません。国際結婚家庭の場合、両親の出身国同士の政治的・経済的な関係が子どもに大きく影響します。アメラジアンの場合も、戦争に負けた国の母親と、豊かな国の父親の血をひくということで、憎しみの対象になりがちでした。生まれた子どもと国同士の関係とは別の問題だ、という意識が大切です。

日本国内における国際結婚は、1980年代半ばから激増して、2000年代半ばにピークに達しました。その多くは、日本人男性とアジア人女性との結婚です。なかには、結婚難に苦しむ農村の自治体や業者を介した国際見合い結婚もありました。もちろん、本人同士の恋愛によって結びついた、幸せな国際結婚家庭も数多くあります。しかし、弱い立場にある女性に、跡継ぎの出産・育児や、老いた親の介護、社会的に疎まれがちな労働などが期待されていることもあります。社会学では、女性が自分より高い階層の男性と結婚することを、上昇婚と呼びます。今日、それは、開発途上国の女性と先進国の男性との間でも生じているのです。こうした社会構造の中に潜む不平等にも、意識的でありたいですね。

厚生労働省の「人口動態調査」によると、2000年以降、日本に生まれる新生児の50人に1人は、両親の一方のみが日本人の、いわゆる国際結婚家庭に生まれています。2016年には、実に19,118人の子どもが国際結婚家庭に生まれています。奈良県でも、900人弱いる「新渡日」の小中学生のおよそ半数は、両親のどちらかが日本人です。

こうした子ども達を、「ハーフ」ではなく「ダブル」と呼ぼうという動きがあります。日本と外国との半々ではなくて、どちらの文化ももっていることを強調し、両方の文化を大切にしたい、という思いがあるからでしょう。「国際児」という言い方もありますが、あまりじっくりこない、という人もいます。その人をどのように呼ぶのか、自分がどのように呼ばれたいのかは、実は大きな問題です。周りの人と話し合ってみるのもいいですね。

今では、国際結婚家庭に生まれた子どもといえば、欧米系で、かっこよくて、英語がぺらぺらで羨ましいなあ、というイメージをもっている人が多いかもしれません。メディアなどでつくられるこうしたイメージは、要注意です。アジア系の人やアフリカ系の人、日本語しか話せない人、日本語は話せない人など、実際の子ども達の背景や状況はさまざまです。その名も『ハーフ』(西倉めぐみ・高木ララ監督、2013)というドキュメンタリー映画があります。日本の学校に馴染めない少年も出てきます。機会があれば、ぜひ観てみてください。

## 5 帰国児童生徒

両親ともに日本人だけれど、海外で生活したことがある、という人もいますね。親の勤務などに伴って日本国外に滞在した後に帰国した、帰国児童生徒(帰国生)がその例です。帰国生は、日本人の海外での経済活動が盛んになり始めた1971年度にはたった1,543人でしたが(文部省「海外子女教育の現状」)、1985年度には1万人を越し、2015年度には12,580人に及んでいます(文部科学省(1985年は文部省)「学校基本調査」より)。

奈良教育大学にも、帰国生のための特別な入学者選抜があります。センター入試はなく、面接等での選抜です。え？ずるって？

では、あなたが中学生で、父親が、たとえばベトナムの工場に転勤になって、あなたは現地のインターナショナルスクールに入ることになったらどうですか？ もちろん授業は英語です。アメリカの歴代の大統領について学んだり、日本にはない service learning というボランティア活動が必修になっていたりするかもしれません。数年後に大学受験。日本史はやっていない、生物の用語は英語で覚えている、英語はわかるけど発音記号は知らない。さて、それでセンター試験はだいじょうぶですか？

そうです。多様な学び方をしてきた子ども達は、多様に評価しなくてはなりません。そうでなければ、海外にいて学んだことは評価できません。せっかく海外で多様な経験ができるのに、現地の言語や文化には触れずに、日本のことばかり気にして生活しなくてはならないとしたら、もったいないことですね。

帰国生を担任することになったら、まずは、その子が安心して日本の環境で生活や学習ができるような配慮が必要です。上履きに履き替えたり、給食や掃除の当番をしたり、跳び箱をしたり、運動会で整列したり…。日本の学校文化は、海外から見ると、けっこう異文化です。

逆に、たとえばアメリカの学校では、制服はないことがほとんどですし、スポーツや音楽の行事は自由参加が多いです。昼食に、チョコレートやポテトチップスを食べても大丈夫です。一方で、授業中ただ黙って座っているのは、よくないことです。積極的に自分の意見を言うことが求められます。「よい子」とされているあり方や「正しい」とされるやり方も、国によってさまざまなのです。

自分の文化のやり方が唯一絶対だという考え方を、自文化中心主義といいます。逆に、さまざまな文化があり、それぞれに価値があるのだという考え方を、文化相対主義といいます。多様な文化的背景をもつ人々が共生していくことが求められる現代においては、自文化中心主義を脱して、文化相対主義の立場に立つことが求められるでしょう。

ですから、帰国生には、日本の学校のやり方を一方的に押し付けるのではなく、その子どもの海外での経験や学習をきちんと評価し、尊重していくことが大切です。それは、日本で育ってきた子ども達の刺激にもなり、お互いが成長するきっかけになります。多様性を豊かさとしてとらえ、それぞれのちがいを学び合える教室でありたいですね。

## 6 多様な文化が共生する教室へ

こうしてみると、他人事にみえていた「外国とのつながりをもつ子ども達」がずいぶん身近なことがわかりますね。日本の教室の中でも、複数の国の文化を経験しながら育つ、文化的に多様な子ども達が共に学ぶようになってきています。子ども達が、将来、海外で生活する可能性は増えていますし、たとえ生涯日本の中に留まるとしても、国籍や文化の異なる人と近所に住んだり、いっしょに学んだり、働いたりすることが、ごく日常的になってきているのです。そもそもあなた自身も、国際結婚をするかもしれませんし、日本人学校や補習授業校という海外にある日本の学校で教えることになって、わが子といっしょに海外生活をするようになるかもしれません。

近代といわれる時代には、多くの国において、学校は、国民の育成を目指してきました。日本の教育は、日本人を育成するためにあったのです。しかし、グローバル化に対応して、教育も更新していかななくてはなりません。「教育基本法」には、「我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」とあります。「我が国と郷土を愛する」と「他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度」とをいかに両立させていくかが重要です。

2017年公示の新学習指導要領の前文には、「あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え」という文言が入りました。また、PISAという国際学力調査を開発しているOECDが定めたキー・コンピテンシーのひとつには、「異質な集団で交流する力」が挙げられています。グローバル時代においては、言語や宗教、慣習といった、文化的な多様性の理解や尊重を促し、多様な人々と合意を形成し、共に活動して、社会をつくっていく力を育てる教育が求められているのです。

### 文献

- 開発教育研究会(2012)『身近なことから世界と私を考える授業Ⅱ オキナワ・多みんぞくニホン・核と温暖化』明石書店  
 「外国につながる子どものたちの物語」編集委員会(2013)『まんがクラスメイトは外国人 入門編：はじめて学ぶ多文化共生』明石書店  
 嘉本伊都子(2008)『国際結婚論!?!【歴史編】』法律文化社  
 川上郁夫編著(2010)『私も「移動する子ども」だった』くろしお出版  
 奈良県外国人教育研究会(2009)『世界の友だちとつながるためにオクケトンム多文化共生編Ⅱ』奈良県外国人教育研究会